

草庵仏教

第146号
(発行日)
2002年8月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
mail: kimyou2@siren.ocn.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

Sさんとの対話

- S** 「生きるのがイヤでもう死んでしまいたいんです」
D 「死にたいほど辛いのですね」
S 「ええ。もう何もかも失った」
D 「何もなくなるといふのは？」
S 「離婚して子供二人も夫の側に引き取られ、子供にも会えない」
D 「会えないというのとは？」
S 「子供たちは岐阜県なので遠く離れているのと、それに夫の側がいやがって合わせないんです」
D 「子供さんに会えないのは大変さびしいですね。それで生活は出来るんですか」
S 「ギリギリです」
D 「離婚の時、お金を貰わなかったのですか」
S 「要求したけど貰えなかった。今は生活保護を受けています」
D 「それでは生活が苦しいですね。今はだれかと一緒に生活していますか」
S 「いいえ一人です」
D 「まだお若いようだから働かれましたらどうですか」
S 「それが働けない体になってしまってるんです」
D 「どうしてですか」
S 「2年ほど前に交通事故にあつて、片手が不自由になってるんです」
D 「それは困ったですね」
S 「結婚に失敗し、子供とも離ればなれ、お金もないし、私のことを心配してくれる人もいない」
D 「孤独なのですね」
S 「ええ、ひとりぼっちです。もう生きていても仕方がない、あとは死ぬしかない」
D 「死ぬしかないと思うほどどうにもならないと感じておられるのですか」
S 「ええ何もかも失ったから」
D 「何もかも失ったから死のうとするか、逆にもう一度ゼロから生きてみようというのはどうでしょうか」
S 「でもどうしたって現実是不変わらない」
D 「現実是不変わらないようで、実は刻々と変わっています。去年のあなたの状態と今年あなたの状態では変わってきているでしょう。昨日の状態と今日とはすでに変化しているのです。状況は刻々と変化し通しです」
S 「毎日変わってきているというわけですか」
D 「ええ。だからあなたの今の状態がすべてであつて、もう変わらないと決めつけなくていいんじゃないですか」
S 「現実是不変わらないと、決めつけられない方がいいといわれるのですか」
D 「ええそうです。人間はとかく自分で思いこんで狭く決めつけてしまうのです。(こうしかない)という風に。自分の思いに縛られてしまうのですか」
S 「今の現実がすべてだと決めつけられないことなのですか」
D 「ええ。あなたの今の状態をトネルの真つ暗な中にいるとしますと、その状態がどこまでも続くと思つけないで、トネルには出口があるように今の状態も時が過ぎてゆくに従つて変わっていくのだと、もう少しゆとりをもつて考えて見てはどうですか」
S 「私は、今の絶望の状態のままで生きるか、それとも死ぬかの二者択一のように考えているんです」
D 「ええ。私たちの苦しみの多くは自分の狭い思いによつてがんにがらめになったところから起こります」
S 「でも、どう思いを変えてみても現実はその変わらないと思つています。障害のある体が元に戻るわけがないし、働けるわけでもない」
D 「確かに現実には変わります」
S 「変わらないといふ死にたいと思う。今となつてはもう取り返しがつかない」
D 「確かに現実には変わらないし過去のことはやり直しは出来ない。けど、どうにもならなくて不幸としか思えない現実を、見直すことはできます」
S 「人生は変えることが出来なくても見直すことはできるといわれるのですか」
D 「ええそうです。私たちが人生に行き詰まるのは往々にして物の見方が固定的あるいは一方的な見方しかできないからです」
S 「現実をどう見直せばいいのかがわかりません」
D 「卑近なところから云いますと、たとえば事故で片手を失つたといわれましたが、(片手を失つたからもうダメだ)という物の見方も、見方を変えれば(まだもう一方の手が使える)という見方も出来ます」
S 「まあそうですか」
D 「何もかも失つたといわれませんが、あなたにはまだ若さも知性もあるし、身体に一部障害があつても体はまだ何かの仕事が出来る可能性があるのじゃないですか。失つたものを嘆くよりも、まだ自分にあるものを見つけてみてはどうですか。出来ないことばかりを考えるよりも今出来ることを考えて見る、これなども一つの見直しです」
S 「マイナス面ばかりを見ているのですが、プラス面を見るのですか」
D 「そうですね。それに仏教的な観点からも見直すことが出来

ます」

S 「それはどういう見方ですか」

D 「この世の気の毒は仏法の薬なり」という言葉を聞いたことがあります。この世の災難不幸というものにあうと気の毒なことだと人にも思われ、また自分もその不幸を嘆きますが、仏法からいうと法を聞くチャンスとなりません。凡夫は順調な時には、仏法などは聞く気もなかなか起こらず、聞いても我が身のこととして身にしてみてもない。けれども病気になる、お金に困ったり、人間関係が悪くなったりとすると、(人生は苦なり)という仏の言葉も身にしてみても感じられ、(世間を頼みにせず弥陀をタノメ)という仏のお心が知れてきます。そのように辛いことやうつとうしいことは仏法を聞く者にとって気付け薬のようなもので、苦しい状況は仏法には良き縁になりやすい。ですから危機はチャンスで、現在のせっぱづまった時がむしろ真実にあう良き機会であるともいえません」

*

S 「そうなんです、人生の先行きが見えないと、どうしても不安になります」

D 「今は先行きが見えないでしょうが、今までどうにもならないままでもうかなくなってきたんだし、今どうにもならないと言いつつ今現にあなたは生きています」

は？」

D 「(もう生きられない)と言っている、そのことがすでに生きている証拠。(生きられない)と言っていることそのところが、自分の思いに関係ないところで、いわば私の思いに先だつて生きている証拠。生かされているしるしです」

S 「頭では生きられないと思っても、そう思うておれることは現に生きているからですね」

D 「ええそうです。どう思うかよりも先に身が生きているのです。それは私の努力以前の出来事ですから、生かされていると言わざるを得ません」

S 「自分のいろいろな思いより身の事実が先だつてあるのですね」

D 「ええそうです。だからこそ、どうにもならぬままだうかなつていくのでしょね人生は」

*

S 「でも思い通りにならない」

D 「人生は自分の思い通りにならないけれど、思い通りにならないままだうかなつていくものですよ。むしろ自分の思い通りにしたいという心が悩みを生み出しているのではないですか。いつでも行き詰まるのは自分の思惑や計画や願望などの思いです」

S 「私の願望をかなえたいというその思いは行き詰まっても、現実そのものは行き詰まらないのですね」

D 「ええそうです。行き詰まるのは心が行き詰まるのであって、事実に行き詰まりはないのです。少なくとも死ぬまでは誰でも生きられます」

S 「確かにそうですね。ただ、死ぬまではどんな形でも生きられるにしても、私のように大事なものを多く失ったものにとつてはみじめな姿で生きなければならぬのが耐え難いです」

*

D 「このまま単に生きているだけではみじめだし空しい。幸せを感じながら生きたいのですね」

*

S 「そうですね」

D 「それなんです、人間はただぼつんと生きているようで、本当は阿弥陀仏とともにいるのです。阿弥陀とはこの上ない真実で、今この私のいる処にっねに働きかけてまします。その阿弥陀仏にであうと、迷い子が母親にであつて抱き取られたような、ほのぼのとした安定感が生まれ、生きることに充実感がでてきます。人間は阿弥陀という普遍的な真実にあうべく定められた存在だと思えます。阿弥陀にあわないと、大地から引き抜かれた草木のようにいのちが枯れてしまいます」

S 「しかし阿弥陀仏にであつて死ぬまではたとえ幸せに生きられても、最後は所詮死ぬんじゃないですか」

S 「死ぬことをすべての喪失だと思ふのも私たちの一つの見方

にすぎません」

D 「だれでもそう思うのではないですか」

S 「死んだらすべて終わりといふのは凡夫の考えにすぎません」

D 「死んだら一巻の終わりと思ふ以外にどう思うのですか」

S 「私たち真宗門徒は浄土に生まれると思わさせて頂いていいます。死ぬと思ふのではなく浄土に生まれると思わせて頂けるのです」

S 「なぜですか」

D 「仏の言葉にしたがつて、(生き死に)の意味を見いだすからです。仏のみ言葉からお聞かせ頂いてみると、私たちともにまします阿弥陀仏が浄土へと導きたもうのです。私の一生は阿弥陀仏とともに生き、阿弥陀仏に導かれ、阿弥陀仏に励まされ、やがて阿弥陀仏の浄土に生まれる一生です。死ぬのではなくて生まれるのです」

S 「そうすると、死ぬまではどういう形でも生きていけるし、生きていけなくなる(死ぬ)時、それは行き詰まりではなくて浄土への生まれを意味するのですね。だから、死も閉塞ではなく、新しい扉が開かれるようなものだと言われるのですね」

*

D 「そういうことです」

*

S 「私自身のこととは道がつくとしても、いつも気がかりなのは、おいてきた二人の子供のことです。まだどちらも小学校です。

無事に生活してゆけるのかいつも心配です」

D 「子供さんのことは当然心配になるでしょうね」

S 「遠くに離れてますし、私の子供と会うことを父親(夫)がいやがって許してくれません。ですから何一つ母親らしいことが出来ません」

S 「親として何もしてもやれないのが情けないんですね」

D 「ええ」

「私とともにいてくださる阿弥陀仏は、同時に子供さんともいたもう仏様です。阿弥陀様がお子さんへの幸せにかかわり、導いていたもうのです。お子さんのことは阿弥陀様のお導きに信頼してお任せしてはどうですか。また、現在何もしてあげられないと言われましたが、お子さんの幸せを念じることは出来るでしょう」

S 「子供の幸せを念じるとは」

D 「阿弥陀様、子供たちが本当の幸せに導かれますように」と念じるのです。これは今のあなたに出来ることです。親の念じる心は子供さんに通じるものだと思います」

S 「そのように念じることは今の私に出来ることですね。有難うございます」

(了)

歎異抄 第十二章第五講

たとい諸門こそりて、念仏はかいなきひとのためなり、その宗、あさしいやしというとも、さらにあらそわずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通のもの、信ずればたすかるよし、うけたまわりて信じそうらえば、さらに上根のひとのためにはいやくとも、われらがためには、最上の法にてまします。たとい自余の教法はすぐれたりとも、みずからがためには器量およばざれば、つとめがたし。(歎異抄第十二章より)

現代語訳——(たとえ他のさまざまな宗派の人々が口をそろえて、「念仏は力のない人のためのものであり、その教えは浅くてつまらない」といつても、少しも争うことなく、「わたしどものように自らさとする力もなく愚かであり、文字の一つも知らないものでも、本願を信じるだけで救われるということをお聞かせいただいて信じておりますので、能力のすぐれている人々にはまったくつまらないものであっても、わたしどもにとつてはこの上ない教えなのです。たとえ他の教えがすぐれていても、わたしにとつては力が及ばないので修行することができません。)

ここで諸門とはさまざまな宗派の人たちであり、広げては諸宗教の人たちといつてもいいでしょう。そういう人たちが「真宗は浅い教えであり、低級な宗教で

ある」と非難してきても、そういう人たちと争うなどいわれるのです。

真宗とキリスト教とどちらが勝れているかを比較したり、真宗と禅宗とどちらが質が高いかを比較しても、結局私がその宗教で救われなければ意味はありません。たとえレベルの高い宗教であってもそれによって私自身が救われるかどうかはその人自身の事です。たとえば臨済禅などは随分レベルの高い宗教だといわれています。それゆえ日本の禅は今や世界の禅にまでなっています。しかし、私は臨済禅についていけるかというと、レベルは高いけど愚鈍で意志の弱い私には及びがたい、すなわち「教法はすぐれたりとも、みずからがためには器量およばざれば、つとめがたし」であつて、私自身の救いにはなりません。私のようなものの救われる法は何かとなると、いろいろ縁がある中で、真宗のお念仏が私のようなものにはぴったりとはまってくさつて、身にそつた救いになってくださる。

キリスト教神学者のD教授の著作に「真宗は社会的な倫理性がない」と批判されています。D教授に限らずキリスト教から真宗を批判される場合、「真宗には社会倫理が希薄である」という点がよく指摘されます。こういう批判は社会活動家などからも、よく聞かされる真宗批判です。真宗の教えからは社会を改革する行動原理が出てこないというのです。

こういう批判をしばしば受ける真宗学の学徒たちは「真宗には社会倫理がない」というコンプレックスを持ち、「真宗の社会性を何とかして打ち出したい」という

願望を強く持つようになりません。真宗の社会性を打ち出さねば、世の中で真宗の市民権を得ることが出来ないというのでしよう。そしてそういう真宗学徒から、真宗人たるものは社会の問題を担うようになければまことの真宗の念仏者ではないという主張さえ表れてきています。

今日の真宗の研究者たちは真宗の中に「社会性」を掘り起こすことを努め、「真宗にも社会倫理がある」ということを強調しています。たとえば聖人がご消息のなかに、「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれと、おぼしめすべしとぞおぼえそうろ」と書かれています。この思し召しは、真宗門徒も世界の平和を願って生きるべきものだとの思し召しであり、外のご消息の中には「とももの同期にもねんごろのこころのおわしましあわばこそ」と仰せられています。これは他者への愛の倫理であるし、唯信鈔文意には「りよし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」とあつて、真宗門徒はすべての人と平等な連帯関係に生きるべきであると、指摘されています。確かにそうだと私も思います。

このように一時代昔の真宗教義の中では表現されてこなかった、他者や社会への親鸞聖人の視座を発掘する教学的営みは現代教学の成果であり、それは大変大事な指摘であります。

ただ、こうした視座を学んで、真宗人として、「真宗は社会性がない」というコンプレックスから解放されたいと思うのですが、教学的に社会倫理を積極的に基礎づける原理を発掘出来ても、それを裏

付ける社会的実践がなかなか表れないので、このコンプレックスを克服するまでに至らずフツフツした思いを持ち続けるようです。

そういう私たちが今この場において弥陀の本願を聞かせて頂くのです。弥陀の本願に喚びかけられている私は宿業の身として喚びかけられている人間であります。宿業の身としての私は、人からいかに「こうあるべきだ」と言われても、「人はそう言うても、私はこうしか生きられない」という私です。(どう言われてもこんな私でしか生きてみようがない)という限界をもっている身であります。

「我が名を称えよ」はこうした宿業の身を大悲し、救いたもう本願のみ言葉であります。弥陀の本願は「あなたは社会的な活動をしているかどうか」をも問いたまわらない。どうしてもみよりのない私のままで、この世に生きる最後の場を与えてくださるのです。ここにおいて初めてまことの落ち着きが与えられるのです。「上根のひとのためにはいやくしくとも、われらがためには、最上の法にてまします」といわれる上根の人とは、厳しい仏道修行の出来る人たちあるいは個人的社会的に倫理実践が出来るような人たちのことともいえるでしょう。

しかしお念仏の大悲に潤されていく時、おのずから社会や世界の苦しみに関心ではいられず、「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」と願い、「とももの同期にもねんごろのこころのおわしましあわばこそ」という聖人の思し召しに心底から同意し、そのように願うて生きることが自然な勢いとなるのであります。

信仰夜話

三河に吉藏きちざうという妙好人がいた。三田源七さんが丹波たんぱから吉藏同行を訪ねて、「私はいかほどお知らせをいただいても、他力ということがわかりませぬ。どうぞ他力ということを一言お知らせください」と問うた。私たちが本願他力とか絶対他力とかをしばしば聴かせて頂くが、ムネに手を当てて「お前は他力と言うことが本当にわかっているか」と問うてみると、何やらぼんやりしている。わかっているつもりでも、深く反省してみると、「他力」を心の中でイメージしているだけでぼんやりしている。わかったとはとてもいえない。

三田さんはそれが気になって、これだよいのであるかと疑問をもたれたのである。そこで吉藏同行を訪ね、思い切った質問をしたのである。「いかほど聞いても他力が分かりませぬ」と。

三田さんのように自分に正直であることが尊い。私たちはともすると、何かひっかかっているがらわかったことにしてしまっている。またわかったつもりになっている。わかったことにして早く楽になるうとする。「本当にお前は他力がわかっているのか」という内心からのささやきが気になっても蓋ふたをしてすませている。だから口に出して問うことをしないので、何時までも蒸し焼きのようにモヤモヤが残り続ける。

この三田さんの問いに対して、吉藏同

行はまず

「よく尋ねてきて下された。しかし他力ということとは、お前もわからぬか。おれもわからぬ」

と答えられた。意外な返事が返ってきたのである。三田さんは最初はびっくりしたかもしれない。普通なら「お前さんはまだ他力がわからないか。もつと聴聞ちやうもんを重ねて、他力をいただかねばならぬ」とか「今はわからぬだろうが、よくよく聞法もんぽうしていけばかならずわかる時がくる」とでも言われそうであるが、そうではなかった。吉藏さんは「お前もわからぬか、わしもわからぬ」と言い放つ。

しかしその後で、「ただわからぬ一つじゃによって、来いよが嬉しいナムアマダブツ、ナムアマダブツ」

と答えられた。この答えは実にはありがたい。弥陀の本願じかづけの言葉である。吉藏同行は「わからぬままで来いよ」との弥陀の仰せそのものをお取り次ぎなされたのである。この仰せすなわち仏のみ言葉を信じる外に別の子細しさいはないのである。

だいたい仏様というても、明瞭めいりやうに知られるものではない。ただ「我をタノメ」の仰せの言葉がまことと響ひびいているのであり、またそれだけで満足なのである。

阿弥陀仏やお浄土はどういうものであるかはもちろん出来るだけ詳しく学び、できるだけ明瞭めいりやうにしたい。そういう要求は大事なことである。深く知っていくことは尊いことである。しかしどこまで知っていても、どこまで本当にわかったか

といえは甚はなはだおぼつかないものである。たとえば「阿弥陀仏は無量なる寿命じゆみゆうと智慧いちぢやうと慈悲のはたらきである」と言われて、一応いちちやうなるほどと思う。けれどもどこまで本当にわかっているのかとみずからに問うてみるとほんの表面だけの気がする。

そういうわからぬだらけの中で「汝を助ける」(若にやく不生者不取正覚しやうかく)という仰せ一つは変わらぬ。またそれだけで充足しているのである。

たとえば、新大阪駅から東京へ行くのに新幹線に乗る。「お前は新幹線に乗って安心しているが、どれだけ新幹線のことかわかっているのか」と問われたら、新幹線がどのような材料で出来ていて、どういう構造で、なぜ高速が出るのかなど、ほとんど何もわかっていない。新幹線の列車のことはほとんどわからないままに乗っていて、それで不足はないのである。安心して乗っているのである。なぜか。それは車掌さんの「この列車は東京へ参ります。お乗りください」という言葉(仰せ)を信じているからである。列車の構造こうぞうや性能せいのうを知ったからではない。人の言葉を信じて乗って、安心して乗っているのである。

しかもこのことは仏や浄土のことをもつともつと詳しく知りたいという要求をさまざまにしない。仏や浄土のことを学んでいくことは、より厳密げんみつにより正確に真宗を了解りやうかいできるし、教法の伝達に役立つものである。ただし、それらがハッキリしないからといってうるたえはない。まことに「ただわからぬ一つじゃによって、来いよが嬉しいナムアマダブツ」である。

住職つれづれ雑感

*七月三日。娘夫婦の引越。引越しといってもすぐ近くである。手伝うことはないかと思つて行くが、引越し屋さんから何人も来ていて手際よくスピーディに運んでいるので、力の弱い私などがうろろろしているに却って邪魔になるというのであきらめた。人の役に立ちたいと思つても、慣れないことの場合、無理にしようとするに却って邪魔してしまうことが結構ある。善いことも条件がうまくかみ合わないと思つてならない。善はお陰様あつてさせていただくものであろう。

*真夏はなかなか寝付きが悪く睡眠時間がどうしても少なくなる。しかも忙しい日が多いので一日中身体がだるく感ぜられる。歳を取っていくと、若い時のように一気に寝るのでなく、少し寝ると目が覚め、また少し寝るといような風になりやすい。しかも歳を取ると慢性疲労のような状態になるといわれているが確かにそうかも知れない。*七月の半ばを過ぎると、鹿の子百合が小さな庭に咲く。甌島瀬々の浦のN・Tさんが球根を贈ってください。それを植えたもので、もう十年以上にもなるが毎年美しく咲く。N・Tさんはすでにこの世におられないが百合の花にN・Tさんを偲ぶことである。

【孟蘭盆会法要】

8月16日(金)
午後2時より

*8月22日の同朋会は
休みます。